

学生提案科目 2016年度「地域の防災を考える」

前ページ掲載の正課授業「地域の防災を考える」の2016年度の活動事例です。吹田市の防災・減災を目指して講義やシミュレーションゲーム、プレゼンに取り組みました。



避難所運営ゲーム“HUG”実践の様子①

活動の概要

目的	地域防災の分野で考動力を具現化する授業の実施 / 被災時に学生ができることを発見すること
連携メンバーおよび役割	吹田市危機管理室参事 竹嶋秀人氏…市の防災に関する講義、避難所運営ゲーム (HUG) の指導 吹田市まなびの支援課…HUGに参加する市民の募集に関する広報協力 関西大学社会安全学部准教授 永田尚三…国の防災・危機管理体制に関する講義 関西大学教育推進部教授 森朋子…教育の質の担保にかかる授業内容のファシリテーション 関西大学総務課長 中村匡志…関西大学の防災に関する講義、学内の備蓄倉庫案内 科目提案学生委員…科目提案にかかる各種業務 (連携メンバー間の連絡調整、各種資料作成、授業内容検討)
活動地域	関西大学千里山キャンパス
活動期間	2015年12月～ (継続中)

連携の経緯

学生提案科目を企画立案する科目提案学生委員会は毎年度、新メンバーで構成される。'15年度「地域の防災を考える」(前ページ紹介)の履修生が'16年度と同授業の運営に関心を示し、当該学生が所属する学生団体KUMC (※)の有志と共に委員にエントリーしたことから活動が開始。吹田市への連携協力依頼の際、危機管理室の竹嶋氏から、被災時の学生の協力は市にとって大きな資源であると示唆されたことに着目し、'16年度は、学生が被災時の自らの役割を発見できる内容で授業づくりを行うことが決定した。

※KUMC…社会安全学部生が2010年4月に結成した各地で防災啓発活動を行う学生団体。128ページ参照

解決すべき課題

- (1) 学生の防災への関心が低いこと
- (2) 学生が被災時にコミュニティの一員としてなすべきことが確立されていない



避難所運営ゲーム“HUG”実践の様子②

関西大学の備蓄倉庫見学

大学の役割

科目提案学生委員の学生が中心となって、連携機関間の調整や授業の企画立案と運営を行った。プログラムは大きく分類し以下の3点で構成。

- (1) 講義…市職員、大学教員、大学職員がそれぞれの知見を活かして、自治体・国・大学の防災体制について講義を実施。次項のシミュレーションゲーム実施にかかる基礎知識を身につけた。
- (2) HUG…カードと模造紙を使用して避難所の運営方法を考えるシミュレーションゲーム。被災後の状況を模擬体験することを目的とする。実施当日はHUGのノウハウを持つ吹田市危機管理室の指導の下で実施した。また、実践的なシミュレーションを体感することやコミュニティを構成する全員で地域防災を考えることを目指し、地域住民の参加も広く募った。
- (3) プレゼンテーション…学生の気づきを整理して参加者間で共有するため、「学生だからできる減災の課題解決策」をテーマに、授業のまとめとしてプレゼンテーションを行った。

上記のプログラムを立案するにあたり、科目提案学生委員の学生は吹田市内で行われた防災イベントに参加してHUGを体験。授業では実際の避難所運営の現場に近い環境で実施できるよう工夫してゲームのサポートを行うなど、授業の質担保にも貢献した。

プログラム終了後には、広島大学で開催されたシンポジウムで学生が本活動事例を報告。経験学習から発見した、大学や地域との連携におけるメリットや課題などを共有した。

成果

- (1) 授業を安定的に遂行
- (2) 地域の方々と学生との交流の機会の創出
- (3) 広島大学のシンポジウムで活動結果を報告

今後の展望

- (1) 防災面での地域と大学の連携強化
- (2) HUGをはじめとする防災啓発行事の場づくり

研究者および学生の紹介



科目提案学生委員会
(かもくていあんがくせいいいんかい)

学生自ら学びたいことを考え、学生の創意による講義「学生提案科目」を開講することを目的に結成される学生組織。委員となる学生は毎年公募によって集められ、教員および事務職員も委員として学生の活動をサポートする。カリキュラム検討や資料の準備、学内外の連携先の調整など、授業に必要な作業全般を学生が主体的に執り行う。



社会安全学部 准教授
永田 尚三
(ながた しょうぞう)

消防防災行政研究について、行政学、公共政策学、政治学の分野から長年研究。研究のみならず、実務家の政策教育活動も熱心に行っている。



教育推進部 教授
森 朋子
(もり ともこ)

専門は、学習研究・教育方法学。認知科学や脳科学の発展に伴い、人かどのように学ぶのか、その学びのメカニズムとプロセスを解明し、その知見を教育方法に活用している。

現場の声

・授業の参加者 (学生)

HUGを通して、自分も避難所生活をする可能性があることや、有事の際には、想像していたよりもはるかにパニックとアクシデントの連続になるだろうと感じた。この経験を周りの人たちに伝えることが大切だと思った。

・授業の参加者 (地域住民)

災害時、避難所の課題 (トイレ、ベット、食糧など) が明確化され、非常に参考になった。若い人と議論できたことも意義であった。日ごろから住民への啓蒙が大切だと思った。